

「高円寺カトリック神学院」

主任司祭 晴佐久昌英

この春休み、わが司祭館は大変にぎやかだった。韓国から李神父を迎えて常住の司祭が三人に増え、春休みに寄宿する神学生が三人重なったため、計六人が住むことになったからだ。

神父、神学生が六人もいると、独特な雰囲気になる。食堂で全員そろって食前の祈りをしているときなど、まるで神学院状態。晴佐久院長以下、澤田霊的指導司祭、李生活指導司祭、倉田学生会長、大西神学生、ルイス・パブロ新生とといったところか。今年度春季限定、高円寺カトリック神学院。それはそれでありかと一瞬思わせてしまうようなキリストの教会のリアリティがあって、正直、うれしい日々だった。

当たり前のことだが、後継者のいない組織は滅びる。いても二代目、三代目がまともな後継者になるとは限らない。この後継者教育ほど重要であるのになおざりにされている分野はないことを考えると、カトリック教会が二千年間、その真理と本質を何ひとつ損なわずに伝え続けてきたという世界史に例を見ない事実がいかに驚異的であるかが分かる。それはすなわち、カトリックにおける後継者育成のシステムが完璧に機能してきたということに他ならない。

その秘密は、言うまでもなく秘蹟にある。イエスは弟子たちに、自らが天地を結ぶ秘蹟であることを実際の体験の中で示し、命がけで教育した。教会もまた、共同体の一致、その教義と儀礼、福音宣言の働きのすべてがキリストに連なる秘蹟であることを、秘蹟そのものを通して徹底して後継者に教育し続けてきたのである。

先日、この三人の神学生に祝福を願うミサを、三人の司祭と教会の素晴らしい仲間たちと共に捧げた。神が高円寺教会に与え、かけがえない体験によって育ててくださった神学生のためにどうしても感謝のミサを捧げたかったし、何よりも、ミサそのものが後継者を育てるからだ。夕方にもかかわらず大勢の人が参列し、ミサの終わりには三人それぞれにまっすぐな挨拶をしてくれて、参列者もまた励まされた。

この春高円寺教会に一瞬出現した神学院は、確かに永遠の教会の息吹を感じさせてくれた。それは誰よりも、後継者自身が知っている。